

[C年] 降誕前節第9主日(2026年10月25日)**【旧約聖書日課】 ヨブ記 38章1～18節**

- ¹主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。
²これは何者か。
 知識もないのに、言葉を重ねて
 神の経綸を暗くするとは。
³男らしく、腰に帯をせよ。
 わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。
⁴わたしが大地を据えたとき
 お前はどこにいたのか。
 知っていたというなら
 理解していることを言ってみよ。
⁵誰がその広がりやを定めたかを知っているのか。
 誰がその上に測り縄を張ったのか。
⁶基の柱はどこに沈められたのか。
 誰が隅の親石を置いたのか。
⁷そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い
 神の子らは皆、喜びの声をあげた。
⁸海は二つの扉を押し開いてほとばしり
 母の胎から溢れ出た。
⁹わたしは密雲をその着物とし
 濃霧をその産着としてまとわせた。
¹⁰しかし、わたしはそれに限界を定め
 二つの扉にかんぬきを付け
¹¹「ここまででは来てもよいが越えてはならない。
 高ぶる波をここでとどめよ」と命じた。
¹²お前は一生に一度でも朝に命令し
 曙に役割を指示したことがあるか
¹³大地の縁をつかんで
 神に逆らう子どもを地上から払い落とせと。
¹⁴大地は粘土に型を押していくように姿を変え
 すべては装われて現れる。
¹⁵しかし、悪者どもにはその光も拒まれ
 振り上げた腕は折られる。
¹⁶お前は海の湧き出るところまで行き着き
 深淵の底を行き巡ったことがあるか。
¹⁷死の門がお前に姿を見せ
 死の闇の門を見たことがあるか。
¹⁸お前はまた、大地の広がりやを
 隅々まで調べたことがあるか。
 そのすべてを知っているなら言ってみよ。

【使徒書日課】 使徒言行録 14章8～17節

⁸リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。⁹この人が、パウロの話すのを聞いていた。パウロは彼を見つめ、いやされるのにふさわしい信仰があるのを認め、¹⁰「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。¹¹群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、わたしたちのところにお降りになった」と言った。¹²そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、またおもに話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。¹³町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒にあって二人にい

けにえを献げようとした。¹⁴使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、服を裂いて群衆の中へ飛び込んで行き、叫んで¹⁵言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。わたしたちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、わたしたちは福音を告げ知らせしているのです。この神こそ、天と地と海と、そしてその中にあるすべてのものを造られた方です。¹⁶神は過ぎ去った時代には、すべての国の人が思い思いの道を行くままにしておかれました。¹⁷しかし、神は御自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天からの雨を降らせて実りの季節を与え、食物を施して、あなたがたの心を喜びで満たしてくださっているのです。」

【福音書日課】 ルカによる福音書 12章13～31節

¹³群衆の一人が言った。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」
¹⁴イエスはその人に言われた。「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」¹⁵そして、一同に言われた。「どんな貪欲にも注意を払い、用心しなさい。有り余るほど物を持っていたも、人の命は財産によってどうすることもできないからである。」
¹⁶それから、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。¹⁷金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らしたが、¹⁸やがて言った、『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産をみなしまい、¹⁹こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』と。』²⁰しかし神は、『愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる。お前が用意した物は、いったいだれのものになるのか』と言われた。²¹自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者はこのとおりだ。」

²²それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。²³命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切な。²⁴鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。²⁵あなたがたのうちのだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。²⁶こんなごく小さな事さえできないのに、なぜ、ほかの事まで思い悩むのか。²⁷野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。²⁸今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。²⁹あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思い悩むな。³⁰それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。³¹ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨブ記 38章1～18節

- 1 主は嵐の中からヨブに答えられた。
- 2 知識もないまま言葉を重ね
主の計画を暗くするこの者は誰か。
- 3 あなたは勇者らしく腰に帯を締めよ。
あなたに尋ねる、私に答えてみよ。
- 4 私が地の基を据えたとき あなたはどこにいたのか。
それを知っているなら、告げよ。
- 5 あなたは知っているのか
誰がその広さを決め
誰がその上に測り縄を張ったのかを。
- 6 地の基は何の上に沈められたのか。
誰が隅の親石を据えたのか。
- 7 夜明けの星々がこぞって歌い
神の子らが皆、喜び叫んだときに。
- 8 海がその体内からほとばしり出たとき
誰が海の扉を閉じたのか。
- 9 私が雲をその上着とし
密雲をその産着としたときに。
- 10 私は海のために境を定め
かんぬきと扉を設けた。
- 11 私は言った。
「ここまでは来てもよいが、越えてはならない。
あなたの高ぶる波はここで止められる」と。
- 12 あなたは生まれてこの方、朝に命じ
曙にその場所を示したことがあるか。
- 13 地の果てをつかんで
そこから悪しき者どもを振り落としたことがあるか。
- 14 地は刻印を押された粘土のように変わり
上着のように彩られる。
- 15 悪しき者どもからその光は取り去られ
振り上げた腕は折られる。
- 16 あなたは海の源まで行ったことがあるか。
深い淵の奥底を歩いたことがあるか。
- 17 死の門があなたに姿を現したか。
死の陰の門をあなたは見たことがあるか。
- 18 あなたは地の広がりを知ったのか。
そのすべてを知っているなら、言ってみよ。

使徒言行録 14章8～17節

8 リストラに、足の不自由な男が座っていた。生まれつき足が悪く、まだ一度も歩いたことがなかった。9 この人が、パウロの話しに耳を傾けていた。パウロは彼を見つめ、癒されるのにふさわしい信仰があるのを認め、10「自分の足でまっすぐに立ちなさい」と大声で言った。すると、その人は躍り上がって歩きだした。11 群衆はパウロの行ったことを見て声を張り上げ、リカオニアの方言で、「神々が人間の姿をとって、私たちのところに降りて来られた」と言った。12そして、バルナバを「ゼウス」と呼び、また主に話す者であることから、パウロを「ヘルメス」と呼んだ。13町の外にあったゼウスの神殿の祭司が、家の門の所まで雄牛数頭と花輪を運んで来て、群衆と一緒に二人にいけにえ

を献げようとした。14使徒たち、すなわちバルナバとパウロはこのことを聞くと、衣を引き裂いて、群衆の中に飛び込んで行き、叫んで、15言った。「皆さん、なぜ、こんなことをするのですか。私たちも、あなたがたと同じ人間にすぎません。あなたがたが、このような偶像を離れて、生ける神に立ち帰るように、私たちは福音を告げ知らせているのです。この神こそ、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造られた方です。16神は過ぎ去った時代には、すべての民族が思い思いの道を行くままにしておかれました。17しかし、神はご自分のことを証ししないでおられたわけではありません。恵みをくださり、天から雨を降らせて実りの季節を与え、あなたがたの心を食物と喜びで満たしてくださっているのです。」

ルカによる福音書 12章13～31節

13群衆の一人が言った。「先生、私に遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください。」14イエスはその人に言われた。「誰が私を、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか。」15そして、群衆に向かって言われた。「あらゆる貪欲に気をつけ、用心しなさい。有り余るほどの物を持っていても、人の命は財産にはよらないからである。」16そこで、イエスはたとえを話された。「ある金持ちの畑が豊作だった。17金持ちは、『どうしよう。作物をしまっておく場所がない』と思い巡らし、18やがて言った、『こうしよう。倉を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や蓄えを全部しま込んで、19自分の魂にこう言ってやるのだ。『魂よ、この先何年ものたくわえができたぞ。さあ安心して、食べて飲んで楽しめ。』」20しかし、神はその人に言われた。『愚かな者よ、今夜、お前の魂は取り上げられる。お前が用意したものは、一体誰のものになるのか。』21自分のために富を積んでも、神のために豊かにならない者はこのとおりだ。」

22イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと、思い煩うな。23命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。24鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。まして、あなたがたは、鳥よりもどれほど優れた者であることか。25あなたがたのうちの誰が、思い煩ったからといって、寿命を僅かでも延ばすことができようか。26こんな小さなことさえできないのに、なぜ、ほかのことまで思い煩うのか。27野の花がどのように育つのかを考えてみなさい。働かず、紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。28今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。29だから、何を食べようか、何を飲もうかとあくせくするな。また、思い悩むな。30それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。31ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは添えて与えられる。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月25日「降誕前節第9主日」の日課主題は「創造」。

・旧約日課は、「ヨブ記」から、友人らとの対話の後にヨブに告げられた主の言葉の冒頭箇所。使徒書日課は、「使徒言行録」から、パウロとバルナバのリストラにおける活動を伝える箇所の前半。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、富に対する姿勢を説くたとえと教えの箇所。

旧約日課(ヨブ 38 章より)

・「ヨブ記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「諸書」に収められた叙事詩文書。「ヨブ」という名の「正しい人」が、不条理にも蒙った苦難に際して、友人らとの対話を通して神の義を問い、苦悶し、最終的には神の告げる言葉を聞くことにより苦難から解放される道を見いだすという筋立てを枠組みにして、散文(1～2章)＋詩文(3～41章)＋散文(42章)という文学形式によって構成されている。本書の大部分を占める詩文部分は、三人の友人との対話の繰り返し(3～31章)、四人目の友人による告知(32～37章)、主の宣言(38～41章)、の三部で構成される。

・本書の内容は、義人伝承物語であり、登場する「ヨブ」を歴史的偉人に遡って同定されることが古くから為されてきた。しかしながら、ユダヤ教の律法解釈集である「タルムード」では、本書の物語を創作寓話とみなす解釈が示されている。バビロン捕囚期に記された「エゼキエル書」は、誰もが知る代表的な義人として「ノア、ダニエル、ヨブ」(エゼ 14:14)を挙げているが、この三人の名のうちで何らかの歴史的人物に遡ると考古学的に推認されているのは「ダニエル」だけで、しかも、正典「ダニエル書」はその歴史的人物の伝承とはほぼ無関係にその名だけを象徴的に用いていると解されている。義人伝承は、王の偉業を称賛するための様式として発展したとも考えられる。

・本書の物語は、「義人の蒙る苦難の意味」を問うものであり、神学的には「神義論」に関するテーマが扱われていると解されてきた。1～2章の散文説話において、ヨブは、主の許可を得たサタンから受ける試みとして財産や家族を失い、また皮膚病を得るという苦難を蒙った者として描かれる。すなわち、その「義しさ」が確かめられるために、ヨブの身には一時的な苦難が及んだものであり、悪をもたらしたサタンは飽くまで善なる主の支配下にあるものである。他方、3章以下で三人の友人らとの対話を通して苦悩するヨブは、友人らの説く正論にも耳を傾けず自分の正しさを主張し続けるループに陥って苦悩しているのだが、四人の目の友人の前で沈黙することを通して、主の前に沈黙してその御声を聞く姿勢を回復したことで、その苦悩から解放された者として描かれている。もともと、旧約正典中では、神に問うこと自体は否定されておらず、むしろ信仰の確立に必要な過程として描かれているとも言える。

使徒書日課(使徒 14 章より)

・「使徒言行録」は、「ルカ福音書」の続巻として著された「初代教会正史」を扱う歴史物語文書。エルサレムで使徒たちを中心とした120人の集団から始まった教会が、「聖霊降臨」によって外へ出て行くことで仲間を増やし、また世界各地に信者の教会共同体が形成されていったことを、前半は使徒ペトロらを柱に、後半は途中で教会に加わったパウロらを柱に、描いている。その過程で、教会は周囲からの迫害だけでなく内部での対立や分裂の危機を迎えるが、ペトロらやパウロらはその危機を乗り越えるために重要な役割を果たし、世界的な教会ネットワーク形成に貢献した人物として描かれている。

・日課箇所は、エルサレムの使徒らによって派遣されたバルナバの指導下にあったシリア・アンティオキアの教会がバルナバのもとに宣教団を組織して派遣した最初の宣教旅行として描かれる中の一場面。この宣教旅行(13～14章)の説話は、バルナバを中心とした宣教団として描き始められながら、徐々に「パウロ」の存在感を強調した描き方に変化している。この一連の宣教旅行説話の最初の場面で、すでに9章以降「サウロ」の名で登場していた人物が「パウロとも呼ばれていた」(使徒 13:9)と紹介され、以後「パウロ」の名で登場させられている。

・日課箇所を含む「リストラ」における逸話(14:8～20)は、一連の宣教旅行説話の最後に位置づけられる逸話で、後段(14:21以下)には、リストラを去った後の行程表と共に宣教成果を伝える叙述があるのみである。「リストラ」は、「ルステラ」とも訳語表記される町で、アナトリア半島内陸部の主要都市コンヤ(コニヤ)から南に30キロほどに位置する遺跡が同定されている。「コンヤ」は、一連の宣教旅行説話でリストラの前に活動をした町「イコニオン」(14:1)を継承した都市。これらの都市を含むアナトリア半島内陸部は、古くは「フリュギア」の名でギリシア神話に登場する人々の地として知られるが、この人々は前12世紀にヒッタイト王国が滅亡した後に侵入し支配的となったインド・ヨーロッパ系の人々と考えられている。マケドニア王アレクサンドロスの東征以後、ヘレニズム化(ギリシア化)が進んだとされるが、歴史的にさまざまな民族文化が混淆している。

・説話の中でパウロやバルナバが称されることになった「ゼウス」や「ヘルメス」は、ギリシア神話の主要な神々。「ゼウス」は、ギリシア神話における主神で、神々と人間の父祖とされる存在。「ヘルメス」は、「ゼウス」を含む「オリュンポス十二神」の一つに数えられる主要な存在で、「神々の伝令神」また「ゼウスの使者」と位置づけられている。バルナバが「ゼウス」と呼ばれ、パウロが「ヘルメス」と呼ばれたとの描写には、バルナバとパウロのそれぞれの役割だけでなく、その主従関係が端的に反映されていると解することもできる。

福音書日課(ルカ 12 章より)

・日課箇所は、主イエスがファリサイ派の人の家での食事を終えて出てきたところに群衆が集まって来たのでお語りになられた一連の教えの場面(12:1～13:9)の中に置かれた教説で、群衆に向けて語られた「愚かな金持ちのたとえ」と弟子たちに向けられた「思い悩むなという教え」を含むが、両者は「富に対する姿勢」という主題で一貫する。後半部の「思い悩むなという教え」は、「マタイ福音書」の「山上の説教」中に並行箇所がある(マタイ 6:25～34、19～21)。

・ここでの主イエスの教えは、「富・財産に対する執着を戒めること」にとどまらず、「富・財産に代え難い命の価値」を思い起こさせ、その「命の支配者としての神に対する信頼」を説くものである。「富・財産に対する執着を戒めること」は、広く説かれていることであるが、それは端的に「恥ずべき罪」として指摘され、「清貧」に対置される悪徳と位置づけられることで、「貧しさ」を勧める教えに転化してしまう場合がある。しかし、「ルカ」には、「富」や「豊かさ」を否定して「貧しさ」を要求する思想は見られず、「富」や「豊かさ」を自己管理する基準として「命の価値」や「命の支配者への信頼」が説かれる。

・「思い悩む」(22 節、25 節、26 節)と訳されているギリシア語「メリムナオー」の原義は「心を分かちつ」で、「心がいくつにも分裂している状態」つまり「あれこれと考えあぐねている状態」を意味する語。前段 11 節「心配して(はならない)」も、この語の訳。「ルカ」は、この語を「マルタとマリアの逸話」(10:38～42)の中でマルタに対する主イエスの言葉として用いている(10:41「あなたは多くのことに思い悩み…」)。しかし、福音書中では、「マタイ」の並行箇所の他に用例がない用語。「ルカ」は日課箇所中でこの語を 3 度用いているが、「マタイ」は 6 度繰り返し用いている。この用語は、この教えと強く結びついて用いられている。

・この「思い悩むな」に対して代わりとなる勧めは、端的に「ただ、神の国を求めなさい」(31 節)として示されている。並行する「マタイ」は、これを「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」(マタイ 7:33)として伝えている。「マタイ」は、「ルカ」や「マルコ」が「神の国」として伝える箇所の多くを「天の国」と置き換えて伝えているが、この箇所については「神の国」をそのまま用いている。この句が主イエスの語録として早い段階で確立していた可能性が示唆される。「神の国」の用例は、「マタイ」5 例、「マルコ」14 例、「ヨハネ」2 例に対して、「ルカ」33 例。

・24 節「鳥(コラクス)」を、「マタイ」の並行箇所は「鳥(ペテイノン)」としている。旧約正典には、神が「鳥」を用いて預言者エリヤを養ったよく知られた逸話がある(王上 17:2～6)。

主日礼拝の讃美歌から

- ・21-17「聖なる主の美しさ」(= I 7)は、19 世紀英国教会司祭モンセルが代上 16:29 に基づき公現日のための讃美歌として作詞。曲は、同時代の米国で知られた讃美歌作曲家シャーウィンの作品。
- ・21-171「かみさまのあいはい」(= 40 番)は、カトリック司祭・佐久間彪が作詞した創作詩編歌(148 編)で、1980 年版『典礼聖歌』に所収後、1987 年版『こどもさんびか2』に採用された。ローマ・カトリック教会は 1960 年代に開催した第 2 ヴァチカン公会議の結果、それまでの世界共通ラテン語典礼という原則を大転換し、信徒が完全に母国語でミサにあずかるという原則で典礼改革が行われた。以来、数多くの日本語典礼聖歌が創作され、その中からプロテスタント讃美歌に導入されたものも少なくない。プロテスタントとの共同翻訳である『聖書・新共同訳』も、この典礼改革の一環で行われたもの。佐久間司祭は、日本でこの典礼改革を担った委員の一人。
- ・21-226「輝く日を仰ぐとき」(= II 161)は、スウェーデンの伝道者ボーベリが作詞した歌詞をスウェーデン民謡の曲で歌うようになったもの。19 世紀終わりごろのスウェーデン語讃美歌集で発表された後、ドイツ語、ロシア語に訳されて歌われるようになっていたものを、英国人宣教師がウクライナで聞いて英訳して紹介した。1950 年代にビリー・グラハムが伝道集会で用いるようになって有名になり、日本には中田羽後が紹介して広く歌われるようになった。

21-17「聖なる主の美しさ」**Worship the Lord in the beauty of holiness**

1. Worship the Lord in the beauty of holiness; / Bow down before Him, His glory proclaim; / Gold of obedience and incense of lowliness / Bring, and adore Him: the Lord is His name!
2. Low at His feet lay thy burden of carefulness; / High on His heart He will bear it for thee, / Comfort thy sorrows, and answer thy prayerfulness, / Guiding thy steps as may best for thee be.
3. Fear not to enter His courts in the slenderness / Of the poor wealth thou canst reckon as thine; / Truth in its beauty, and love in its tenderness / These are the offerings to lay on His shrine.
4. These, though we bring them in trembling and fearfulness, / He will accept for the Name that is dear, / Mornings of joy give for evenings of fearfulness, / Trust for our trembling, and hope for our fear.
5. Worship the Lord in the beauty of holiness; / Bow down before Him, His glory proclaim; / Gold of obedience, and incense of lowliness / Bring, and adore Him: the Lord is His name.

21-226「輝く日を仰ぐとき」**O Store Gud *English tr. by Stuart K. Hine***

1. O Lord my God, When I in awesome wonder / Consider all the works Thy Hand hath made, / I see the stars, I hear the mighty thunder, / Thy pow'r throughout / The universe displayed;
[Refrain] Then sings my soul, / My Saviour God, to Thee, / How great Thou art! How great Thou art!
2. When through the woods / And forest glades I wander / I hear the birds Sing sweetly in the trees; / When I look down / From lofty mountain grandeur / And hear the brook / And feel the gentle breeze;
3. But when I think / That God, his Son not sparing, / Sent Him to die, I scarce can take it in, / That on the cross My burden gladly bearing / He bled and died To take away my sin;
4. When Christ shall come, / With shouts of acclamation, / And take me home, / What joy shall fill my heart! / Then I shall bow In humble adoration / And there proclaim, / "My God, how great Thou art!"

来週の誕生日 (10 月 25 日～31 日)